

にれそいくほあめるとゆけまいねわちえこみうの  
 なるせやきへんにれそいくほあめるとゆけまいね  
 とりすもかふをなるせやきへんにれそいくほあめ  
 てらしめおひえとりすもかふをなるせやきへんに  
 つよさむえはうてらしめおひえとりすもかふをな  
 ちえこみうのいつよさむえはうてらしめおひえと  
 たゆけまいねわちえこみうのいつよさむえはうて  
 そいくほあめるとゆけまいねわちえこみうのいつ  
 せやきへんにれそいくほあめるとゆけまいねわち  
 すもかふをなるせやきへんにれそいくほあめると  
 しめおひえとりすもかふをなるせやきへんにれそ  
 さむえはうてらしめおひえとりすもかふをなるも  
 こみうのいつよさむえはうてらしめおひえとり  
 けまいねわちえこみうのいつよさむえはうてらし  
 くほあめるとゆけまいねわちえこみうのいつよさ  
 きへんにれそいくほあめるとゆけまいねわちえこ  
 かふをなるせやきへんにれそいくほあめるとゆけ  
 おひえとりすもかふをなるせやきへんにれそいく  
 えはうてらしめおひえとりすもかふをなるせや  
 うのいつよさむえはうてらしめおひえとりすもか  
 いねわちえこみうのいつよさむえはうてらしめお  
 あめるとゆけまいねわちえこみうのいつよさむえ

日语语音研究——

# 近世唐音



张升余 著

にれそいくほあめるとゆけまいねわちえこみうの  
 なるせやきへんにれそいくほあめるとゆけまいね  
 とりすもかふをなるせやきへんにれそいくほあめ  
 てらしめおひえとりすもかふをなるせやきへんに  
 つよさむえはうてらしめおひえとりすもかふをな  
 ちえこみうのいつよさむえはうてらしめおひえと  
 たゆけまいねわちえこみうのいつよさむえはうて  
 そいくほあめるとゆけまいねわちえこみうのいつ  
 せやきへんにれそいくほあめるとゆけまいねわち  
 すもかふをなるせやきへんにれそいくほあめると  
 しめおひえとりすもかふをなるせやきへんにれそ  
 さむえはうてらしめおひえとりすもかふをなるも  
 こみうのいつよさむえはうてらしめおひえとり  
 けまいねわちえこみうのいつよさむえはうてらし  
 くほあめるとゆけまいねわちえこみうのいつよさ  
 きへんにれそいくほあめるとゆけまいねわちえこ  
 かふをなるせやきへんにれそいくほあめるとゆけ  
 おひえとりすもかふをなるせやきへんにれそいく  
 えはうてらしめおひえとりすもかふをなるせや  
 うのいつよさむえはうてらしめおひえとりすもか  
 いねわちえこみうのいつよさむえはうてらしめお  
 あめるとゆけまいねわちえこみうのいつよさむえ

外语教学与研究出版社



——日语语音研究——

# 近世唐音



张升余 著

外语教学与研究出版社  
北京

## 图书在版编目(CIP)数据

日语语音研究: 近世唐音 / 张升余著. — 北京: 外语教学与研究出版社, 2007. 12  
ISBN 978-7-5600-7132-9

I. 日… II. 张… III. 唐音—研究 IV. H113.2

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2007) 第 199944 号

出 版 人: 于春迟

责任编辑: 钟 诚

封面设计: 王 薇

出版发行: 外语教学与研究出版社

社 址: 北京市西三环北路 19 号 (100089)

网 址: <http://www.fltrp.com>

印 刷: 中国农业出版社印刷厂

开 本: 787×1092 1/16

印 张: 12.25

版 次: 2007 年 12 月第 1 版 2007 年 12 月第 1 次印刷

书 号: ISBN 978-7-5600-7132-9

定 价: 30.00 元

\* \* \*

如有印刷、装订质量问题出版社负责调换

制售盗版必究 举报查实奖励

版权保护办公室举报电话: (010)88817519

这本书是我八年前的博士论文，当时学校（关西大学）征求我的意见是否出版？因我患椎间盘突出病，心情不太好，没有时间修改，所以婉转谢绝了。回国后，治理自己的病，休息了一段时间，也就搁置起来了。后来因为担任学校的日语系管理工作，一直忙于学科发展和日常工作杂务，未能腾出手来做这件事。现在，想起来还是自己太懒惰了。

关于“近世唐音”这个课题，研究的人实在是太少了。原因有两个。一个是它的音韵系统太乱、太杂。它不是中国古代唐朝时期的音，而是中国明清时期江南一带的方言音。“唐音”是指中国的汉字读音。当时日本把中国叫“唐国”，也就是由于中国唐代在世界上的兴盛和地位，加之该时期日本受中国文化的影响，日本崇拜和尊重中国，直至明清时期，日本人仍然称中国为“唐”。另一个是唐音在日语词汇中所占比重较小。

该书是以“近世唐音”研究为主线，对唐音进入日本语言的经过、历史根源、形成过程、使用现状、文献资料的多少、与中国各方言音的对照、唐音反映的当时日语音韵的实况、中日语言交流的瓜葛、以及相同特殊音（入声字音、以及与[-N][-ŋ]音有关的拨音等）的相互影响、唐音的位置等问题进行相关的论述。

我认为还有一点值得向大家推荐的是本书中关于中日文化交流的历史实况。有明清时期中日两国文化交流、贸易往来、人员往来的实况，有该时期大量的文化交流文献资料可供读者参考，可帮助广大日语教育者进一步了解唐音在日语汉字音韵中的位置和使用价值，还有它的语言变化及其在语音变化中的意义。对于研究中国音韵变化寻找旁证也有十分重要的意义。

最后，我想该书能够出版，首先要感谢西安外国语大学为此提供的支持和帮助。另外，要感谢我的导师远藤邦基教授和纸谷荣治教授多年来对我殷切的关怀和耐心细致的指导。也感谢日本筑波大学教授汤泽质幸先生、日本佛教大学教授榎本福寿先生等人为该论文提出的诸多帮助。同时也感谢所有关心我成长的人。

张升余

2007年11月22日

|           |   |
|-----------|---|
| はじめに..... | 1 |
|-----------|---|

## 第一章 近世唐音の文献資料及びその特徴.....4

|                         |    |
|-------------------------|----|
| 1. 近世期の日中貿易及びその関係 ..... | 4  |
| 2. 近世唐音資料の成立と種類.....    | 6  |
| A. 黄檗宗唐音文献資料 .....      | 7  |
| B. 唐通事唐音文献資料 .....      | 9  |
| 3. 参考資料 .....           | 14 |
| 4. 近世唐音資料の特徴.....       | 16 |
| 5. 近世唐音資料の研究現状 .....    | 17 |
| 注釈1 .....               | 18 |

## 第二章 近世唐音資料に反映される中国語と日本語の特徴.....23

|                           |    |
|---------------------------|----|
| 1. 近世唐音に反映される中国語の位相 ..... | 23 |
|---------------------------|----|

|                               |    |
|-------------------------------|----|
| 2. 近世唐音資料に反映される中国語の音韻体系 ..... | 26 |
| 3. 近世唐音資料に反映される中国語の語彙特徴 ..... | 29 |
| 4. 近世唐音資料に反映される中国語の文法特徴 ..... | 30 |
| 5. 近世唐音資料に反映した日本語の音韻特徴 .....  | 33 |
| 注釈2 .....                     | 38 |

### 第三章 近世唐音の実態.....42

|                           |    |
|---------------------------|----|
| 1. 近世唐音は中国江南地方の音である ..... | 42 |
| 2. 南京官話音 .....            | 45 |
| 3. 杭州音と寧波音と福州音 .....      | 49 |
| 4. 近世唐音と中国語音との対応 .....    | 51 |
| 注釈3 .....                 | 53 |

### 第四章 近世唐音と明清中国語音との比較.....56

|               |    |
|---------------|----|
| 1. 果撮字 .....  | 56 |
| 2. 假撮字 .....  | 57 |
| 3. 遇撮字 .....  | 58 |
| 4. 蟹撮字 .....  | 59 |
| 5. 止撮字 .....  | 59 |
| 6. 效撮字 .....  | 60 |
| 7. 流撮字 .....  | 61 |
| 8. 咸撮字 .....  | 61 |
| 9. 深撮字 .....  | 62 |
| 10. 山撮字 ..... | 62 |
| 11. 臻撮字 ..... | 64 |
| 12. 宕撮字 ..... | 64 |

|                 |    |
|-----------------|----|
| 13. 江撮字 .....   | 65 |
| 14. 曾撮字 .....   | 66 |
| 15. 梗撮字 .....   | 66 |
| 16. 通撮字 .....   | 67 |
| ○ 明清時代声母表 ..... | 70 |
| ○ 明清時代韻母表 ..... | 70 |
| 注釈 4 .....      | 71 |

## 第五章 近世唐音の転写法 .....72

|                     |    |
|---------------------|----|
| 1. 唐音転写による唐音歌 ..... | 73 |
| 2. 反切法の利用 .....     | 77 |
| 3. 直音法の利用 .....     | 80 |
| 注釈 5 .....          | 83 |

## 第六章 近世唐音の音価推定 .....85

|                        |    |
|------------------------|----|
| 1. 近世唐音の音価 .....       | 86 |
| 2. 近世唐音表記中の撥音「ㄣ」 ..... | 95 |
| 3. 近世唐音表記中の促音「ㄘ」 ..... | 97 |
| 4. 近世唐音表記の多様性 .....    | 97 |
| 注釈 6 .....             | 99 |

## 第七章 結び..... 102

|                  |     |
|------------------|-----|
| 1. 近世唐音の分類 ..... | 102 |
| 2. 近世唐音の性格 ..... | 103 |



|                                           |     |
|-------------------------------------------|-----|
| 3. 近世唐音に代表される中国語の実態.....                  | 103 |
| 4. 近世唐音に反映されている日本語の音韻.....                | 104 |
| 5. 近世唐音の転写法.....                          | 105 |
| 6. 近世唐音の利用 .....                          | 105 |
| 注釈 7 .....                                | 106 |
| <b>参考文献</b> .....                         | 107 |
| 付録1【16摂各字唐音と中国語音の対照表】 .....               | 112 |
| 付録2【慶安元年(1648)－安政四年(1858) 期間唐船入港数表】 ..... | 182 |

# はじめに

日本語漢字音について、呉音や漢音の研究は多いが、唐音についての研究は殆どなされていない。その理由は唐音の音韻体系が複雑であることにあろう。また、中世唐音と近世唐音との間にも、一律に語れ切れぬ差異が存在している。そして、中世唐音の資料がごく限られた量しか存在しないこともあり、本稿では近世唐音を中心に検討する。

近世唐音の資料は大体十六世紀から十九世紀初期までの間のものである。資料の内容は明、清両時代の南京官話及び江南地方の方言音を反映している。そこで、以下に近世唐音の転写法やそれに反映された共時態の音韻状態等を整理し、比較分析し、当時の音韻の全貌を考察することにした。

本稿は七つの章に分けて論ずる。まず、第一章では近世唐音資料の種類及びその成立時期などを述べる。第二章では近世唐音のカナ表記に反映された音韻特徴について検討する。第三章では南京官話音と江南方言音の音韻特徴に対する近世唐音の対応を検討する。第四章では具体的に南京官話音、杭州音、寧波音、福建音を近世唐音の表記と比較する。そして、その二種類の資料に反映されている差異を追求する。第五章では近世唐音の音価について推定したいと思う。第六章では近世唐音の転写法について考察する。第七章は結論で、近世唐音の音韻系統や音韻法則、転写法及びその位相などを総合的に検討する。

なお、近世唐音の研究原理、方法などについては特に章節を設けることをせずに、次のように簡略にしておく。

近世唐音資料は近代中国語をカナで写音したものである。その注音の方法と原理は、漢音や呉音のとは、異なるものである。

呉音は、昔の中国呉語地方の音を記したもので、漢音は五、六世紀の呉語地方の音と違った隋、唐時代の中国北方音（長安音）を基礎にしたものである。近世唐音は、時代がいささか下がるが、近代中国の江南地方の音を基礎にしたものである。

但し、呉音や漢音は長期間にわたって日本語の中に多用され、また常用されていたため、次第に日本語に融合された。結局、ほとんど音韻的にも語彙的にも日本語化してしまった。これに対して、近世唐音は日本語に常用されるのはわずかなものである。近世唐音資料を見ると、発音などの面も全体として中国語の文献と、ほとんど変わらないようである。異なっているのは漢字の横に発音を示すカタカナが付けられていることである。つまり、近世唐音資料にカナで写された音は中国近代江南地方の方言語音である。わかりやすく言えば、今日の日本に市販されている注音のある中国語教科書と同様のものである。勿論、全く中国語音と同じとは言えない。例えば、現在、中国語を学習する人は多いが、通訳官や言語能力の優れた人は別として、一般の日本人の発した中国語音は、ほとんど聞き取れない（筆者の日本留学五年間の経験による）。従って、近世唐音は当時、唐通事や唐話学を学習した人たちの間では、理解できたかもしれないが、一般の日本人では、まず理解できるはずはないであろう。

しかし、この近世唐音資料に反映している日本語の仮名音と当該時代の中国語音は専門書としては非常に研究する価値がある。

古い時代の音韻研究の場合は、よく外国語の発音のあるものを利用して、その対応関係を対照しながら考える方法をとっている。

近世唐音資料は当時の日本語音韻と中国語音韻の両方を反映する好資料としての価値を持っている。それを研究するにはその両方の音韻体系を考察すべきである。そこで、本稿は主に近代中国語の音韻体系を基礎にして、近世唐音の原型を分析したいと思う。

近世唐音は音韻学では借音、または対音と呼ぶことができる。その研究の方法としては訳音の対応である。このような音韻体系は二種類の言語音を共に反映しているので、それぞれの音韻の帰納や整理に有利だし、問題のある音を解明するのにも役立つと考えられる。ここでは先ず推論の方法として、その漢字に代表される音を考証する。なお、原則としては、信頼性の高い資料を使うことと、資料に付された表記音を

客観的に分析することを基本的姿勢とする。

具体的には、唐音資料の性格の確認（資料の版式、成立時期、編集者、内容形式の構成、対応性の評価などを含む）と収集、書誌的な分析、整理、語彙の解説、中国語音の音韻分析、唐音との対照比較、分析結果のチェックなどの過程を通じて論を展開したい。

# 第一章 近世唐音の文献資料及びその特徴

## 1. 近世期の中日貿易及びその関係

近世唐音の文献資料を紹介する前に近世期の中日関係を了解する必要がある。

江戸時代、戦乱を治めた徳川幕府が秀吉の強圧的外交方針を改め、貿易を盛んにするために親善政策をとり、来航する外国人に対して優遇な処置をとったので、諸外国との通交貿易が盛んになった。

一方、キリスト教禁止のため、寛永十二年（1635）に日本人の海外渡航と海外居住者の帰国が禁止され、中国船やオランダ船の来航も長崎一港に限られるようになった。そのために、日本は完全に鎖国の政治となっていた。

中国は、明朝の中期から江南地方で農業、手工業、糸棉の紡績工業、商業などの発達で経済を発展させるために、積極的に日本と貿易を行った。

近世期の日本は鎖国状態のまま、日中貿易を行った。そして、その交渉は日本船の出航がなく、外船だけの長崎一港限りの一方的往来であった。しかし、日本は外船について、糸割符商法や口銭分配や信牌発行などいろいろな条件を設けていた。当然のことながら、中国商船もその制限のもとで貿易を行うことになっていた。そのかわり、日本商船の外出は全く記録されていなかった。

人物の交流も同様、中国人の渡来という一方通行的なものであった。唐船来航はただ貨物の貿易だけでなく、中国語で書かれた律令、儒学書、漢詩、物名類書など、当時の日本側の要求に応じて一緒に運ばれてきた。このように、鎖国した日本では外国貿易船（中国・オランダ）の来航と、中国文化人の渡来によって、外来の新文化の摂取を行ったのである。近世唐音もこの様な状況の下で成立したのである。

江戸時代に日本と中国との貿易は長崎一港に限って行われたが、その貿易は厳し



い制限のもとに置かれていた。長崎は封鎖された日本唯一の開港場であった。それゆえに魅力ある中国の宝物、薬産、典籍、珍器、異品、絲絹類等の到来する場所となつて、唐船新渡の品々は江戸人がほしいものであった。

当時の中日貿易は『長崎年表』によると、天正三年（1580）唐船の来航から始まり（唐商船の正式来航は慶長五年（1600）秋から、安政五年（1859）まで（唐船も蘭船も不来）、前後二百六十年ほど続いた。その間、唐船、蘭船の来航総計は6361艘である。その内、蘭船は546艘（8.58%）、唐船は5815艘（外積船406艘を含む）（91.42%）となっている。詳細は付録2の唐船入港表を参照されたい。

また、『長崎年表』の凡例に、

ナンキン ニンボ ブダセン アモイ タイワン カントン ウォンチウ シウサン フーチウ チャンチウ  
南京、寧波、普陀山、厦門、臺灣、廣東之ヲ口港トシ 温州、舟山、福州、漳州、  
東京、柬埔寨之ヲ中奥港トシ…。（関西大学図書館蔵本P5）

と説明しているように、当時の中国貿易港と船の所属地をはっきりと証明している。船頭名（船主）や入港順などの詳細については、大庭脩著『唐船進港回悼録』及び長崎県立長崎図書館渡辺文庫蔵『唐船進港回悼録』に詳しく述べられているので、ここでは省略することにする。

唐船の貿易と共に、唐僧（特に黄檗僧）の渡来も盛んであった。それは元和六年（1620）唐僧真圓和尚（南京人の寄付で興福寺創建）の渡来をはじめ、安永五年（1777）万福寺第二十一代の大成照漢（1709－1784）の渡来まで、およそ百五十年ほど続いた。その内、黄檗僧は前後百二十人ほどにのぼる。また、黄檗僧の中、福建出身は九十二人、浙江出身は十二人、その他は、江蘇、安徽、江西、山西、河北等が少数を占めた。また、中国から渡来（或いは帰化）の唐通事、医者、芸人等の文化人や黄檗の檀越、皈依者等は四十人いた。それは、朱之瑜（朱舜水）、戴曼公（獨立性易）、劉宜義（彭城仁左衛門）、陳明德（穎川入徳）、陳道隆（穎川藤左衛門）、魏貴（鉅鹿清兵衛）、高玄岱（深見玄岱）などの有名人であった。

当時、唐船に搭乗した人のうち、医者や文化人などもたくさんいた。例えば、寛永四年（1627）、浙江金華府の医者陳明德（帰化後穎川入徳と改む）が渡来、元禄十六年（1703）浙江杭州府の医者陸文斎が渡来した（医術を講義した際、高玄岱、深見新右衛門玄岱等が通訳した）。享保三年（1718）には、李勝先、鍾聖玉という

二人の船主に「良医一人連渡」との要請があって、蘇州の名医呉戴南を連れてきた（呉氏は福濟寺で病死）。享保五年（1720）には、文人の伊孚九（諱は海、字は孚九、號は苾野、匯川、也堂等）が来航した。彼は画をよくし、特に山水画が日本人の好みに合い、珍重された。同六年（1721）、福建汀州府の朱来章が渡来した。同七年（1722）、医者陳行徳が渡来した。同十年（1725）蘇州府崇明県の医師周岐来が樊方宜、周維全という二人の調剤方及び僕人の毛天禄を連れて渡来した。同年、朱来章が兄朱佩章、朱子章と同行して再び渡来した。医書『周朱復言』及び『享保復言』は、この二人（周岐来・朱来章）の著書で、有名である。同十一年（1726）、蘇州崑山県の医者趙淞陽が渡来、同年六月、浙江の射騎陳采若、沈大成、馬医劉經先が渡来した。享保十六年（1732）、画師沈南頻が渡来した。彼は日本画史上、重要な人物で、日本に写生画の技術を伝え、それにより、長崎派は興った。書画詩については、黄檗僧の中に傑出した人が多かった。例えば寿昌派心越<sup>⑧</sup>は書画だけでなく、琴譜を伝来したことで、有名である。

以上の人物は、中日両国間の文化学術交流の上に大きな功績を残している。そして、これらの人物はすべて江南地方の出身である。彼らは文化、技術などを伝えると共に、当然、中国江南音をも伝えた。

一方、当時、黄檗宗に帰依した日本の有力者の中には、後水尾法皇（円浄・道覚）、酒井忠勝（讃岐守・空印居士）、上野玄貞（塵隱・熙々子）、岡嶋明敬（璞・玉成・援之・冠山）、北島雪山（三立・雪参・蘭隱）、島津重豪（南山・栄翁）、林道栄（蘿山・墨痴・官梅）<sup>⑨</sup>などがいた。彼らも近世唐音の伝播や発展、及び中日の文化学術交流などに大きな功績を残した。

## 2. 近世唐音資料の成立と種類

「唐音」は普通、音韻研究上では「唐宋音」と呼ばれる。鎌倉時代に禅宗の伝来と共に禅宗諷誦の唐音も渡来した。この時期の唐音を中世唐音と考える。

その次、江戸時代に貿易の通訳用語と黄檗宗諷誦の唐音が伝来した。この時期の唐音を近世唐音と考える。言い替えれば、宋の時代に伝来されたものが中世唐音（宋

音)、明清時代に伝来されたものが近世唐音(明清音)と考えられる。したがって、近世唐音の資料には、黄檗宗諷誦の経文資料と、唐通事の学習教科資料という二種類がある。

有坂秀世氏、奥村三雄氏、飯田利行氏、湯澤質幸氏等は黄檗僧のもたらしたもののや長崎唐通事のもたらしたものを「近世唐音」と呼んでいる。唐通事唐音の成立については、厳密に言えば、慶長九年(1604)の唐通事設置以来から言うべきである。慶長九年(1604)から享保元年(1716)までは、唐通事唐音の資料はあまり見られないが、その時期の中日貿易の交渉で、実際に唐話の交流が発生したと考えられる。したがって、唐通事唐音の出現は黄檗唐音のよりも早かったはずである。しかし、唐通事唐音資料の出版は、実に黄檗唐音資料のより後五十年ほど遅れている。次にその二種類の資料を紹介してみよう。

## A、黄檗宗唐音文献資料

黄檗宗唐音資料は、主に黄檗禅宗の経文書で、すべて中国語読誦音のまま、唐音仮名をつけたものである。これについて、筆者の調査したものは、主に万福寺黄檗文化研究所文化殿の蔵書である。以下、それを簡単に紹介する。

### ➡ A1、『禅林課誦』

『禅林課誦』は黄檗宗開祖隱元隆琦(1592-1673)の在世中の寛文二年(1662)に刊行された。黄檗声明の演奏や伝承には『禅林課誦』が主な日課用経本として現在でも用いられている。筆者の調査したところ、『禅林課誦』は四種類の版本がある。つまり、寛文二年の「田原版」(京都大学図書館蔵田原仁左衛門刊木版和装本)と、黄檗重版本(黄檗文華殿重刊複写折本)と、貝葉書院本(龍谷大学図書館蔵貝葉書院刊木版折本上下二冊)と、其中堂本(昭和二十八年其中堂刊(現行版)活字版折本)である。前三種の所注唐音には大きな差が見られないが、最後の現行版本は前の注音と多少異なっている。例えば、

「如イ°→ヂ・ジ、早サ°ーウ→サウ、刹サ°→ツァ、大タイ→ダ」というように改編してある。そして、従来慣用の特殊記号は一切付されてなくなっている。

## ➤ A2、『弘戒法儀』

『弘戒法儀』は隠元隆琦が編集したもので、明暦四年（1658）に刊行された。当初は隠元初来の禅経講義（テキスト）として使われたようである。それは読誦の部だけに唐音が付けられ、解釈の部にはすべて返り点が付けられていて、唐音は付されていない。この資料は万福寺文華殿の蔵書である。

## ➤ A3、『黄檗清規』

『黄檗清規』は新黄檗山萬福寺が建てられたのち三年目（寛文三年（1663））に、隠元禅師が住持の席を二代目木庵性沼（1616－1684）に譲って、松隠堂に退隠生活を送っていた時代に、弟子の高泉性敦（1633－1695）に命じて著述したものである。そして、隠元は『遺囑語（老人預）』を著し、没後の規範とされた。正式に刊行されたのは寛文十二年のことであった。

現存の萬福寺文華殿蔵本には「龍飛壬子季良月穀旦山城州黄檗山萬福寺開山老人隠元琦書于松隠丈室隆琦槩主印」とあるように、隠元は臨濟宗の規制と正統性を保持するために、強い責任感をもって、書いたのである。唐音注は半分以上の文に付されているが、唐音のない部分もある。

## ➤ A4、『慈悲水懺法』

『慈悲水懺法』は筆者の調べたところでは、以下の三種の版本がある。第一種は武州江府新山仁左衛門捐資刻の明暦二年（1656）刊の折本（上中下三冊本）である。中にはすべて唐音が付されている。第二種は萬福寺文華殿蔵「寛文壬子季春黄檗山蔵院沙門鐵眼募重刊」とあるように、一般によく知られる寛文十二年（1672）刊（上中下三冊）の和装本である。しかし、この版本には唐音は付されていない。各冊の後ろに「音釈」があるが、それは中国語の反切である。第三種は寛文十年（1670）刊の和装本（全一冊本）であるが、各図書館や禅宗関係の研究所等には、収蔵されていない。筆者の拝見した資料は広島大学教授沼本克明氏からいただいたものである。それには、全文に唐音が注され、巻末に、「音釈」、「音釈補遺」、「呼字糾謬」、「国字旁音例」などの項目が設けてある。この資料は黄檗唐音を考察していく上での好資料である。つまり、唐音のカナ表記とその「音釈」の反切と、更に「国字旁音例」の説明とがある。この三